

望ましい経験や

活動をさせるための教師の配慮

—— 戸外あそびを中心として ——



馬路やゑ子

(一) はじめに

戸外あそびといっても、漠然としているが、この場合、幼児の体育的なあそびは、もちろんのこと、戸外でする幼児の素朴で、原始的なあそびを、全部含めて考えていきたい。

ひとりひとりの幼児が、のびのびと心も身体も開放して、自己を表現できるのは、やはり、大自然のなか、つまりは、大地の上、はてしない大空の下ではないかと思うのである。

室内では、経験のできない、自然の素晴らしきの中で、豊かに、そして、新しく、望ましい経験を積み重ねていくことである。この場合、教師の配慮として考えられることは、幼児の要求が何かを見つけ出すことであり、その幼児の要求を十分に、満足させてやること、大切なのではないかと考えるのである。

これまでも、私自身、よく反省することであるが、幼児たちが、スベリ台とか、ブランコ、鉄棒などの、固定遊具であそぶ場合、まったく、幼児たちにまかせて、ただ、外観的に、「うまく、あそんでいる」といったような、安易な考え方になったり、マット、とび箱、平均台といった移動遊具などで、体力的なあそびをねらった場合、教師自身が、前面的に出過ぎて、幼児の要求を無視し、とんだり、ころがったりしている。それだけで、幼児自身、よろこんでやっているのだと、早合点し、自己満足に終っていたのではないだろうか。

幼児と共に、あそぶなかで、ひとりひとりの幼児たちは、十分に満足しているのか、また、集団の中で幼児仲間の、ぶつかり合いといったものを、日日の保育の大きな流れのなかで、見失い勝ちではないだろうか。

マットという新しい環境を与えてやることによって、教師の思いも及ばなかったあそびが発展し、さらに、それが、チャンスと なって、次の新しい環境を幼児自ら作り出していくことが可能に なったり、新しいルールを、自分たちに合ったように作り変えたりしていくといったこともみられるのであるが、私たちは、つい、あせてしまつて、早く結論を出そうとしてしまいほしくない だろうか、じっくり、幼児たちにも考えさせ、行動させることの方 が、大切だと思ふのである。

また、幼児たちのどんなにちっけな、とるにたりないような 発見、おどろき、感動が、何気ない幼児のしぐさのなかにあった としても、日日の保育のなかで、たくさん見落してきていたので はないかと、反省させられるのである。

そこで以下に、

① 怪物くんとKちゃん

② けしの実の、ふとっちょさんとほそつちょさん、

の実験をあげて、この問題について、具体的面を通して考えて いきたい。

(二) 怪物くんとKちゃん

五月一日

マットを使った、体育的なあそびをねらつて、朝早く、テラス

にマット二枚を準備しておいた。O、K、Mの、いずれも、活 動的な幼児は、早くも、マットの上にねそべったり、またいだ り、とんだりしている。

教「きょうは、おてんきもいいし、マットを、そとへはこんで ほしいんだけど」といってしまつた。K「せんせい、これそと へもつてもええの」と念を押すように聞く。「ええ、いいわ よ、あんたたち、ちからもちだから、つってつてくれる」

K、O、Mは、同時に、「ウワイ」といいながら、思い思い に、マットを持ちあげようとしたが、なかなかうまく運べない。 そのうちに、ひっぱり始めた、一枚のマットを、三人で思い思い にひっぱるので、これも、うまくいかない、見ていて、何かいい なくなつてきたが、しばらく、みつめてみると、K「こんなんあ かへんわ、まあちゃん、そこんこもつて、ぼくが、こつちもつ て」といった。

まあちゃんと指名された幼児は、すなおに持ちかえたので、無 事に、一枚のマットは、園庭に運び出された。

取り残されたMは、ひとりでひきづり出したので、私は、すか ざず、そばでほんやりつつ立っているHに、「ねえ、ぼくも、て つだつてあげてね」といった。すぐ協力してくれたので、二枚目 のマットもスムーズに運び出された。

そこへ、ままごとコーナーで、あそび出していた、E、T、

A、S、の四人が、「ごちそうができたから、せんせいも、たべにきて」と呼びにきたので、「あら、せんせいにもごちそうしてくださるの、うれしいわ」といって、ままごとあそびの、仲間いりをしながらも、さっきのマットのことが気になり、どうしているかしら、と窓ごしに園庭をみつめると、私の考えているようなマットでのあそびは、全然しないで、マットを二枚、別々に並べ、足で地面に線をひき始めた。何が、はじまるのかしらと、さらに注意してみつめていると、盛んに、Kは、他の三人に、何かいっているようすであるが、何のことか、室内にいる私には理解しにくい。ただ、わかっていることは、今、私の手のとどかない所で、意外な形でマットによるあそびが、展開されようとしていることである。

そこで、女の子たちには、悪いなあと思いながらも、私は、戸外での男児のあそびに興味を感じ、「どうも、ごちそうさまでした。せんせい、おなかがいっぱいになったから、すこしおさんぽにいつてくるわね」といって、その場を立ちさろうとすると、いっしょにお客さんになっていた、B、N、C、P、U、の五人も、「わたしもいこう」といってついてきた。

ごちそうを作っていた、T、S、のふたりは、「せんせい、おさんぽって、どこまでいくの」とついてきた。

教「あのね、きょうは、とっても、おてんきがいいでしょう。

だから、そとへいこうかとおもったの」「ほんなら、わたしもついでいこう」と教「いいわ、みんなでいきましょうね。でも、そこんどこにおちてるごちそうや、おさらなんかも、ひろってね」A、E「ええ、いいわ、わたしたち、ちゃんときれいにしとくわ。ふんだら、われるもんね」といって、さっきと片づけはじめた。

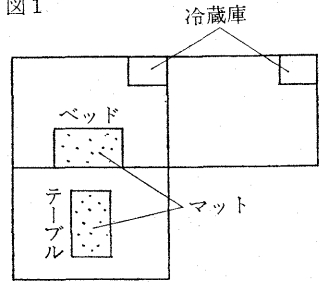
「じゃあ、なるべく、はやくいらっしやいね。ちょっとおききに」といって、下靴とはきかえる間も、もどかしく急いで、マットあそびの所へいって、しばらくようすを、みつめることにした。

いつの間にか、メンバーがふえ、身体的では、クラス一、大きいがおっとり型のF、反対に、クラスで一番小さいが、愛嬌のあるL、よく友だちのことを、告げ口にくるが、人なつっこいP、長島選手とニックネームのあるUも、いっしょである。

例のKはとみると、両手を顔の前ですり合わせて、奇妙な格好をしている。何のまねかと、しばらくみつめた。K「フランケン」F「フンガ、フンガ」といいながら、両足をふんばって、両手をゆっくり動かした。

K「オオカミオトコ」、O「ウォーデガンズ」、K「ドラキュラー」M「ハイザマス」このようすをみていたA、「せんせい、このこたち、かいぶつくんごっこしとんのやに」と教えてくれた。

図1



マットは、怪物くんのベッドになり、テーブルになったりしている。(図1参照)

マットを媒介として、このようなあそびが、展開されるとは、想像もしていなかつたので、私は、一瞬、呆然としたが、次の瞬間、予想もしなかつたことばを発していた。

「ねえ、かいぶつくん、せんせいたちも、なかまにいられてくれたかい」K「うん、せんせいは、ひろしくんのおかあさん、おんなのこたちは、きんじょの子どもになんの」

教「ひろしくんのおかあさんや、きんじょの子どもたちは、どうしたらいいの」K「ここが、アラマそうっていうアパートなん、ほんでさ、そこにおつたらええんやんか」私には、あまり、ピンとこなかつたのが、それ以上聞くことは、さし控え、怪物くんの、いうとおりにした。

それからは、怪物くんの命令に従って、オオカミ男も、ドラキユラーも、フランケンも、ひろし君も、みんな行動した。勝手に動いては、怪物君におこられてしまうので、私は、何かよい思案はないかしらと、思いめぐらしたが、この場に、適切な言葉もう

かばないので、教「かいぶつくん、おかあさんね、しょくじのじゅんびを、しなくっちゃならぬの、いろいろおかいものしてくるわね」K「うん、いいよ」教「おみせやさんは、どこがいいかしら」K「ほんならさ、これもつてつたらええに」と、マットを、ひっぱり始めた。

教「あら、これもらつてつたら、かいぶつくん、ベットがなくなるわよ」K「ええもん、またもつてくん」といって、国旗掲揚台のそばまで、運んでおいた。それまで、私のうしろにばかりくっついてた女児の五〜六人は、店やさんに早変わり、「いらっしやい、いらっしやい」と口口に、声を張り上げている。しかし、この場合、何も売る品物もないのである。売るものも、買うものも、ただ、手まねだけで満足している。

買物をすませ、アパートへ帰ろうとすると、さっきまで店やさんになっていた女児も、さっさとついてきて、何のこだわりもなく、近所の子どもたちになって、マットのテーブルで、食事をするまねをしたのしんでいた。このようなあそびが、次の日もつづけられた。しかしながら、あそびのルールが、みんなの幼児たちに理解されにくく、一方的な、リーダーの考えについていけなくなり、仲間から、ぬけていく幼児も出てきた。

三日目、Kが、すべり台をすべり終った所で、ひとりしょんぼりしている。いつもの元気なKには、考えられないことなので、

変だなあと思い、教「どうしたの」とたずねた。すると、今にも泣き出しそうな顔で、唇をかみしめ、何かをいいたそうだが、言葉にならない。教「あら、いやだ、いつものKちゃんらしくないじゃない、げんきだしてよ」それでもまだ、だまっている。

教「かいぶつくんがないたりして、だらしないわねえ」と、ついで口をすべらせた。K「そやけど、だあれもかいぶつくんごっこしてくれやへんのやわ」といって、とうとう泣き出した。私は、この時、Kにも、このように、気の小さい面があったことに、気づき、はっとした。教「そうだったの、どうしてみんなあそびないのかしら」K「しらんわ、そんなこと」といいながら、それでも泣くのをやめた。教「じゃあね、みんなに、いちど、きいてみましょうよ」それには答ええない。私は、早速、室内で、レールセットであそんでいる幼児たちに話しかけた。

教「Oくんたち、きょうは、かいぶつくんごっこやめたの」
O「うん」教「どうしてやめたの」O「どうしても、こっちのがおもしろいもん」M「それやし、Kくんばっか、かいぶつくんになるんやもん、ぼくらにさしてくれえへんもんな」と口をどがらせていった。教「そうだったの」内心、へやっぱり〜と思った。

教「Kちゃん、みんなはね、かいぶつくんごっこしたいんだって。でもね、ぼくが、かいぶつくんばかりしているから、つまん

ないらしいわ。ぼくだって、だれかが、かいぶつくんばかりやって、ぼくが、オオカミ男か、フランケンばかりだったら、いやになるでしょ」K「うん」教「ねえ、だったらどうしたらいいの」K「かわるの」といった。

教「そうね、やっぱり、かわりばんこにするほうがいいわね」といいながら、私は、ふと、次のようなことを考えていた。

役割は交替するとしても、これまでのルールでは、怪物くんひとりの意志で、他の者が動かされていて、ひとりひとりの意志が、あまりにも認められていない。これでは、いくら役割交替してもつまらない。やっぱり、みんながたのしめるためにも、共通のルールにしてみたい。さらに、マットだけでなく、平均台、とび箱などの移動遊具やすべり台、鉄棒、ジャンブルジム、うんていなどの固定遊具も総合的に使って、あそべないものかと思いついた。

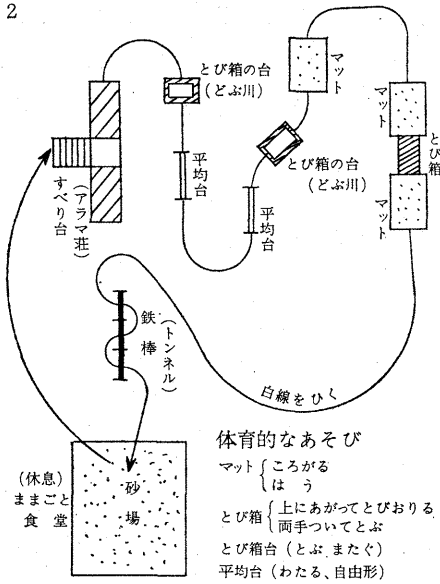
教「ねえ、みんなとそうだししたいことがあるんだけど」ともちかけてみた。

S「なあに、せんせい、そうだんて」とおしゃまなSが、まっ先に興味を示した。教「あのね、かいぶつくんのすんでいる、アラマそうっていうアパートのことだけど、きょうは、すべりだいにしたら、つうろなんかだったら、ほら、そこんところにある、へいきんだいなんかをわたっていったほうが、おもしろいとおもう

んだけど」s「それ、いいんじゃない、ねえ、はやくもっていいよ」

他のみんなも、理解したらしく、くちぐちに、「フランケン」「フンガ、フンガ」「オオカミオトコ」「ウォーデガンス」「ドラキュラー」「ハイザマス」「ひろしくーん」「ハーイ」など、急に活気づいてきた。怪物くんの歌をうたいながら、遊具を運ぶ者、白線をひく者など、自主的に参加した。女兒も、全員参加し、長時間、たのしむことができた。(図2参照)

図2



五月八日

この頃、当園では、「うどん」とか、「へび」とかいった、ジャンケンあそびが、流行していた。女兒の、五、六人が、平均台を、二本つないで、両端から自由に渡り、ぶつかった所で、ジャンケンし、負けたらその場でおりて、また、ふり出しへもどるといった、ジャンケンあそびを始めた。そこへ、例の、かいぶつくんが好きで、Kがやってきて、「ぼくもさして」T「おとこのこはだめ」教「あら、おとこのこは、どうしてだめなの」T「ほんでも、おとこのこたち、むちゃするもん」教「じゃあ、せんせいが見ていてあげるから、なかにまにいてあげてね」とたのんだ。やっと仲間に入れてもらったK、しんみょうに、順番を待っている。

しばらくみつめていたが、これなら大丈夫だろうと思ったので、私は、室内でのあそびはどうなっているかと、気になり、その場を離れた。室内でも、レールセット、ブロックキャップ、ままごなどなどのあそびが、スムーズに行なわれているので、ほっとした。再び、戸外に出てみたところが、先ほどの、平均台でのジャンケンあそびは、全く、異なったあそびに変化していた。

メンバーも男児の数がぐんとふえ、平均台の数も四台つなぎ、その両端の地面に大きな円がかかっている。思わず、「どうなっているの」といおうとしたが、しばらく、ようすをみることに

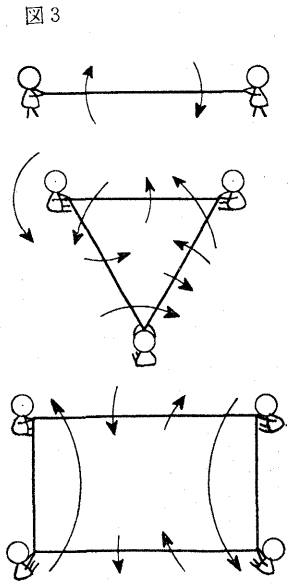
にした。そのまゝの、おのの怪物くんの家と、怪物くんの友人のひろし君のアパートになっていて、平均台はその通路である。へああ、また、かいぶつくんごっこが、はじめたのだなとおもった。

しかし、よくみると、ジャンケンをしているので、なるほど、そうだったのかと、納得がいった。つまり、外観は、怪物くんごっこのように見えるが、「うどん」とか「へび」のジャンケンあそびと、少しも変わらないことに気づいた。女兒たちも、結構、たのしんでいるようだったので、ほっとした。

六月十四日

T、E、A、B、N、P、Q、C、Sの九人の女兒たちが、なわとびを始めた。最初は、それぞれ、ひとりどびをしていたが、ふたりが、紐の両端を持って、波とび、へびとび、などといって、とびっこを始めた。しばらくするとTの発言で、三本の紐を、同じような間隔に離して、とんだり、低いの高いのままで、とびっこをしている。

ロープのなわは、直接身体にあたると痛いので、私は、わごむをつなぎ合わせるといくらでも長くなるし、手や足に当たっても痛くない紐ができることを話すと、すぐに、作りたいといひ出した。五米位の長い長い、ごむ紐ができた。早速、あそびのつづきが始まった。私は、どのように、この一本のごむ紐のあそびが変



化していくのか、興味深く、観察した。図3のような、とびっこを始めた。ひっかかったりしてころんだら、紐を持っている人と交替するといった、ルールがきめられた。

教「おもしろそうね、せんせいもさしてね」T「はい、どうぞ」ブランコをしていた、U、P、もとんできた。テラスで、うりやさんごっこをしていた、F、D、M、I、Rの五人もやってきて、「さして」といったので、思わず、「はい、どうぞ」といってしまった。すると、T「あかんよ、わたしたちにいわんと」といわれた男児は、すなおに「さして」と女の子たちに頼んだので、スムーズにあそびがつづけられた。

Tが、リーダーで「へかえる」へうさぎへいぬなどになって表現しながら、いろいろにとんだりしていた。O、Kがやってきてしばらくみていたが、何を思ったのか、マット二枚をもってきて、ごむ紐の下へおいた。何事が始まるのかと、興味を持ってみ

ていると、マットの上をはって、ごむ紐にさわらないように、通
り抜けた。

今まで、とんでばかりいた幼児たちも、まねをして、マットの
上をはいながら、向う側へ渡った。次には、K、ごむ紐をとん
で、マットの上へころがる。次の幼児もまねをして、とんでころ
がる。じゅんじゅんにまねをした。また、ごむ紐の向う側に、手
をのばし、低くしてどぶ。T「そんなのダメ」といったので、K
もすなおにやめた。今まで、ひとりひとり、とんだりしていたの
が、ふたりで、手をつないでどぶ。

あとの幼児もまねをして、ふたりでどぶ。人数が合わないで、
ひとり残りそうだったが、T「さんになでとぼう」といい、いっ
しょにとんだ。Kが仲間いりしたことで、Tのリーダーから、K
に移行していったようだ。K「ちょっとまっとって」といって何
かどりにいった。

何かしらと違って、期待していると、こんどは、カラーフープ
を持ってきて、マットの上においた「フランケン」「フンガ、フ
ンガ」といって、そばへよっていく。K「ぼくが、ひっぱんで、
みんなつかまんの」といって、ひとりで、ひっぱろうとしたが、
なかなか思うようにならない。「フランケン」は、こっちへく
んの」といって、自分の方へ、O、F、Mの三人をこさせた。

K「みんな、ならぶの、こっちは、さんになでひっぱるで、そ

っちは、ひとりずつやに」といって、じゅんじゅんにひっぱ
た。しばらくこのあそびもつづいたが、やがて、ごむどびから離
れて、カラーフープによるあそびを始めた。

カラーフープに、四人ほどつかまり、ぐるぐるまわる。そこ
へ、もうひとつのカラーフープを持った男児が、ころころころが
す。ぐるぐるまわっている幼児にあたると、交替して、カラーフ
ープをころがすといったあそびに発展していった。このようにし
て幼児たちは、次から次へとあそびを生み出していくのでした。

(図4 図5 参照)

以上、テレビまんがの、怪物くんかぶれの、ともすれば、ボス

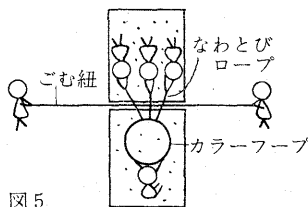


図4

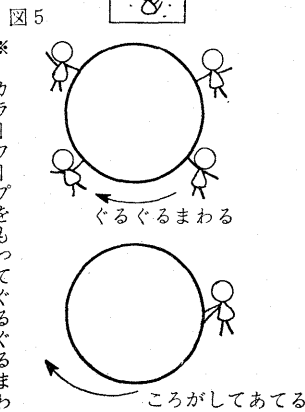


図5

※ カラーフープをもってぐるぐるまわ
りする人数は、ふたり〜六人
カラーフープをころがしてあてる人
数はひとり〜ふたり

的な言動をとりかねない、Kちゃんをめぐって、教師の予想した、マットでの体育的なあそびからは、まったく異った形であそびが発展していったが、教師は、中断させないで幼児たちのあそびを見守ってやると同時に、あそびの仲間いりして、このあそびを發展させてやったことは、幼児の自己を發現するのに、とても役立ったのではないだろうか。

(三) けしの実のふとつちよさんとほそつちよさん

六月二十四日

朝から、学級の花壇の手いれを計画し、幼児たちとともに、戸外へ出た。ねこのひたいほどの小さい花壇だけれど、つい最近まで、ひなげしの花で満開の時は、それはそれは、あどけなく、ひらひらとまうちょうちょうのように、風にゆれては、幼児たちにやさしく話しかけてくれたものでしたが、今は、色あせ、見るかげもなくなってしまうていた。

私は、そのはなやかだった頃の、花のイメージをそっと胸にえがきながら、せつせと根っ子からひっこ抜いた。幼児たちも私のまねをして、力いっぱいひっこぬいた。突然、幼児のひとりか、「せんせい、このまるいもんなあに」と聞いた。よく見ると、いとも可愛い実が、一本、一本につつましく、ついでいるではありませんか、「ああ、それね、おはなのたねよ、そのなかにはい

っているの。そのたね、らいねんまくと、また、きれいなおはながさくわよ」と私は、いとも現実的に、そっけなく答えてしまった。

「ウワーほんとう、わたし、うちへもらっていいこう」「わたしも」「ぼくも」と、とり合いが始まった。教「あらら、そんなにとりあいしなくても、たくさんあるわよ」われ先にとり合っていた幼児たちも安心して、一本、一本、ていねいに折り始めた。E「せんせい、こっちはまんまるだけど、こっちはながいよ」私は、はっとして見なおした。なるほど、ちよつと見たところ、同じように見えるが、よくよく見つめると、みんな、それぞれ少しずつではあるが、形や大きさがちがっていることに気づいた。

「ウワー、これすぐでぶつちよさん」と、おちゃめなTがさけんだ。他の幼児たちも、負けずに、「ウワー、これも、すごいでぶつちよさん」「それよりか、こっちのほうが、でぶつちよさんや」と、お互いいい争っている。また、O「ワーこれは、ほそながやで、のっぽや」「これは、ちびちゃんや」「これ、ほそいで、ほそつちよさん」「こっちは、ふとつちよさん」と思っているのをおいいた。

また、自分の家族の人の名前をつける幼児もいる。B「これがおとうさん、こっちがおかあさん、これがわたし、こっちのちいさいのが、まきみ」といったり、お互に、となり同士で「かくれ

んぼしましよ」「ジャンケンしましよ」「たかたかとうばんしましよ」など、おにあそびが始まるかと思えば、一方では、おうち作りが始まる。

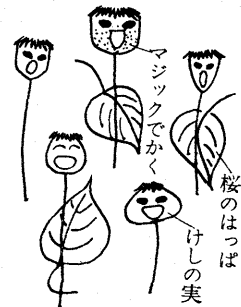
ひとり、ひとりの家を作っている、材料はと見ると、玄関、応接間（ソファー）、お風呂、ベットなどに、植木鉢のかけたのか、ブロックのかけたものを拾ってきたり、木の葉などを使っている。

少し離れた男児のグループにしてみると、消防署作りに熱中、消防自動車は、木の葉である。もうひとつのかたまりはと、のぞいて見ると、砂のレール、砂の乗物作りが、展開され、いずれも、けしの実の消防署員、運転手、お客さんにしたっていた。

私は、このように、小さいけしの実が、幼児たちの心をゆさぶり、こんなにも、いろいろのあそびに発展することを予想もしていなかったことだったが、私も心うれしくなり、あそびの仲間にいれてもらおうと、花壇の手いれもそこそこに、保育室へずっとんでいって、細書用の、マジックインキを持ち出し、交代して、目や口をかいた。時間のたつのも忘れて、あそんでしまった。この後、保育室に戻り、演出する者と、観客とに別れ、簡単な、対話あそびに誘導した。（図6参照）

以上、この活動は、偶然的、突発的で、予想されなかった活動ではあったが、幼児の発見、疑問に、教師自身感動し、幼児とと

図6



もに、新しい経験を深めていったように考えられるのである。

また、自然物を利用して、形のちがいが、色のちがいを見つけ出し、さらに、ドラマテ

ィックブレイのようなものへの、手がかりともなったのではないかと思うのである。

(四) ま と め

以上、私の、つたない実践中から、戸外あそびでの、ふたつの異った場面をとりあげて述べてきましたが、要するに、幼児たちが、いきいきと活動している姿こそ、望ましい経験であり、教師の配慮としては、タイミングのよい、サゼッションであるとも考えられるのである。

今後とも、幼児たちの「目」をみつめ、教師自身も目を開き、耳をそばだてて、幼児たちの発見と発想を大切にしながら、指導の手がかりとしていきたいものである。

(四日市市立三重幼稚園)